

令和6年度 沼津商業高等学校 第2回学校運営協議会（議事録）

1 日 時 令和6年10月19日（土）午前9時から11時40分まで

2 場 所 沼津商業高等学校 中会議室他

3 出席者

会 長 石川 元康 日本大学短期大学部准教授【学識経験者】
副会長 齊藤恵美子 福祉施設勤務【地域住民】
委 員 島田 裕介 清水町上徳倉自主防災長【地域住民】
委 員 加藤 力也 清水町立南中学校長【学校運営に資する活動者】＜本日欠席＞
委 員 中口 美香 本校PTA会長【保護者】
委 員 川瀬 典子 清水町教育委員会社会教育課社会教育推進係
【学校運営に資する活動者】（以上敬称略）

校長（中村）、副校長（野澤）、教頭（青木）、事務長（大塚）、商業科長（臼井）、
生徒指導課長（實石）

4 内 容

(1) 授業参観

オープンスクールに合わせて公開されている第1時間目の各授業を参観

(2) 学校説明会傍聴

中学生及び保護者向け学校説明会を傍聴

(3) 校長から

- ・本校の現状としては、地域連携・外部人材の活用について、商業科目を中心に、非常に積極的に行っており、地域からの信頼を得ることにもつながっていると感じている。一方で、保健室、相談室を利用する生徒も多く、上手く人間関係を築くことができない生徒も目立つ。
- ・県立高等学校の在り方に係る地域協議会（沼駿地区沼津部会）にて協議されてきた「静岡県立高等学校の在り方に関する基本方針」や「沼津地域＜県立高校＞のブランドデザイン」等の情報共有を図り、今後の沼津地域の高校教育の方向性について確認

(4) 協議・意見交換

ア 本校の強みと課題について（学校から）

強み

- 地域連携による生徒の育成・地域人材の輩出
- 地域から信頼され愛される学校
- 資格取得、インターンシップ、課題研究における探究活動等、教育活動の充実
- 部活動による学校の活性化

課題

- 「共に学び合う授業」実践の深化
- 特別支援教育・教育相談の充実による生徒支援
- 主に部活動指導による教員の長時間勤務

イ 学校へのアドバイス・授業参観等を通して感じたことについて
(各委員の発言要旨)

石川委員

- ・大学においても、最近では、他人とのコミュニケーションを上手く取ることができない学生が増えているように感じる。教員の負担を減らすために、専門家の力を利用しており、例えば、スクールカウンセラー、専門医とつなぐコーディネータを配置（常駐）し、日常的に学生をサポートしている。
- ・地域連携については、一部の教員の力に頼るのではなく、組織的・計画的に進めるべきであると感じる。核となっている教員がいなくなったとき、そのつながりをどう継承していくのかという問題も起こるため、是非組織として進めてほしい。

齊藤委員

- ・外部人材の活用については、生徒がどんな道へ進んだとしてもいろいろな人と関わってきた経験は、大きな強みになると思うので、是非、積極的に進めてほしい。
- ・世の中では、普通科へ行く方が無難だという考え方もあるが、沼商へ行くと、新たな専門分野の学びができることを、もっと積極的に発信していくとよい。県立高校としては、各々の学校がそれぞれの特色を発信し、お互いに足りない部分を補い合うことが大切なのではないか。

島田委員

- ・3年生の学びに向かう姿勢がとてもよかった。沼商の強みを吸収しているから、自信を持って学校生活を送っているのではないかと感じた。一方、保健室、相談室の利用生徒が多いということで、学生版のストレスチェックがあるのならば、そういうものを活用するのも一つではないか。
- ・中学生が、高校を選ぶのは難しいと思うので、この学校に入ると、将来、こういう企業で、こういう活躍ができるというところを示してあげると、より学校が選びやすいのではないか。OBの活躍を、学校案内に掲載するのもよいのではないか。

中口委員

- ・時代とともに、授業のやり方も変わってきている。特に、商業高校の商業科目は、高校から新しく学習するので、横一線からのスタートとなり、商業に強い子、商業で力を発揮することができる子が生まれると思う。そういうことを、積極的に中学校へアピールしていくべきだと思う。
- ・校則について、見直しを進めている現状が分かった。学校は集団生活であり、社会に出たときに、企業のルールを守る必要があるという点でも、校則には、ある一定のラインを設ける必要はあると感じる。

川瀬委員

- ・新型コロナウイルス感染症の一連の影響もあり、学校へ行くことができない子が増えていると聞く。また、カウンセリングの時間が足りないという声も聞く。教育については、自分の時代がこうだったから、こうあるべきだという決め付けや押し付けは、排除すべきである。
- ・この夏の清水町立南中学校におけるサマースクールボランティアは、高校生、中学生、双方にとってもよい機会であった。是非、地元中学校との連携を積極的に進めてほしい。